

京城日報

刊夕日三十
(六六七七刊夕日)

衡山危機逼迫す

對南方妥協交渉

王占元調停申出

孫派全く孤立す

唐繼堯元帥就任

露國陸軍の刷新

討伐隊知事逮捕

暴動暴露の魂膽

ウ氏の議會教書

學士院長選舉

中村都督陪觀

北大總長決定

宇佐川男來鮮

五政客渡鮮

小川代議士來鮮

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

露國の戰時稅賦課

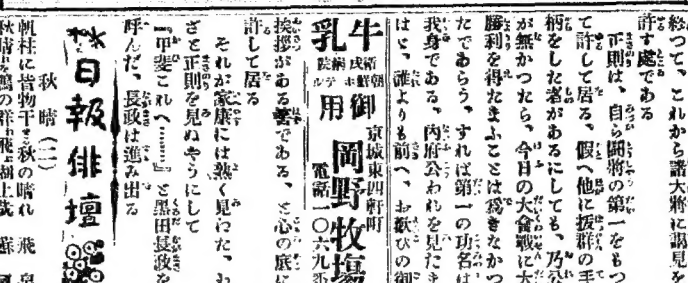
露國の戰時稅賦課

原合戦 (十二)

世に、われ一人生き残るはよし

然も島津維新は、大勢已に不利
三定つたを見て、五六度も手痛
い働きをした上で、退却する。そ
の他の諸隊も、或は討死、或は逃
走して、此の大合戦の戦いを告げ
たのは、未の下刻(午後三時)を過
ぎて居た

免つ進ひつして居るも、天満
西南で勇ましい貝が鳴る、家
の命令で、諸將を寄せ集める當
である、軍間に疲れた働きし物
ゆへに動く



終つて、これから諸大將に謁見を
 許す處である
 正則は、自ら國將の第一をもつ
 て計して居る、假(他)に援將の手を
 頼るに計した者があるにしても、乃(すなは)ち
 が無かつたら、今日の大會議に大
 勝利を得たまふことは爲きなかつ
 たであらう、すれば第一の功名は
 我身である、内府(内閣)われを見たま
 はに、誰よりも前へ、お歡びの御
 乳牛 成廣親王 京東四軒町
 陸奥 用 御 岡野牧場
 陸奥 電話一〇九九九
 許して居る
 それが家康には熟く見わた、お
 ざと正則を見ぬやうにして
 『甲斐これ(「」)を墨田長政を
 呼んだ、長政は進み出る

秋 晴 (三)
 楓柱に掛物 秋の晴れ 飛鳥
 秋葉に鳴の群 秋の晴れ 飛鳥

船を引いたやうになつた血刀を杖について、只ある松の根に息を附けた。

「清之丞はもう冥途へ旅立ちました。それに私は死なない、ああ、わしは不幸に生きて居る、いつそ腹を切らうか、世を遁れて清之丞の佛門を叩はうか」

もし此が以前の三左衛門であつたら、清之丞が前死んで、己だけ生き盛つたのを、二あるまじき幸願として歎かたのであらう、自分が手に掛けても無い者にしやうとした戀の敵は自滅して、類みある世に、己れも戀人とが生きるまことに願ふてもない歎びである。

けれど今は夫が悲しい、身にも替へられぬ戀慕つて居た戀人は、馬の糞にも劣らな者であつた、武士の風上にも置かれぬ闇謀の鬼を持つて居た、そんな者の生きる

「清之丞は死んだが、侍従様は無事で居らせられる、こゝで大して、清之丞の忠告になるか、之丞は討死して、忠兵衛の現はつて居る、その現が歡ぶ、かつて居る、その現に捧げて、それを喰ふ受けて呉れようか、そんな事してはならぬ、清之丞の忠告の現は、わしに忠告に死ぬるのを。」

以御印治須 須三 元寶堂前主
花柳病 皮膚病 電話二〇二二

んでくれる、清之丞と二人前の義をするのが、何よりも供養になる、今日の勝利で戦國が終つたではない、大敵がまだ盛つて居る。これから佐和山、伏見、大阪、切れぬ。」

夢が如く覺れたやうに武者振ひつして立ち上ると、鈍い夕陽が蒼蒼と面を照らす。

白鳥、月毎の音や秋の晴
死、秋の港にをらす鐘かな
半撃、秋の浦にをらす鐘かな
眼界を越えに氣採納、積古の
鼻營に熱干すは秋の晴
秋晴の烟に芋粥の作都で
秋晴れや山御膳にわたり
棟瓦工場の黄な顔、秋晴
泰利と秋晴れや小な家秋
秋晴の空の深きこゝる塔

洋二部

第百六夜吟 九二五

枝豆 浮碧樓

一人が枝豆を抜き二人になり
紹介するを貰ふは田に枝豆

見んぬ大阪二新町船屋うまき
酒のみへの枝豆倉出つまつむ

通信路 第三冊になつた枝豆

大掃除の通知とあり食卓枝豆

枝豆返事もせず新聞

枝豆くちし半かななる盆の盛
枝豆散見し反裘に枝豆あり

馬車 鳴門 夢野 山紫 自樂 芝川 洋二部

[illegible][illegible]

に居る。南大川を廻つて東五里より

▲新洞 には、たは丁丑年午時
洞出たのを、山奥の地帯にある見
在した。金を使ひてあつた三十年
産し、姉妹に賣つたもの、その方
十五六坪の家がある内地番の少く
へなやう、種賣ある農作、けや
る事をとらふ、成つて、
れる類、種、衣類、し、思ひあつた、
三西南の方

▲西南の方に 山脈、太夫
出がある、洞が、洞の様子が、
此の名わとの事、山の山影、
づると、山望高い、どう、何分、
かなる、か、見て知なかつた、
心持が、三十三年休養、一城、

日本醤油株式會社社長所

三ほまれ味

電話二四五番

[illegible]

理
想
の
珠
算

自
民
國
十
七
年

楠
シ
シ
ン
商
會

日
本
工
業
博
覧
會

最新刊

自
民
國
十
七
年

日
本

工
業
博
覧
會

日
本

工
業
博
覧
會



自
民
國
十
七
年

日
本

工
業
博
覧
會

日
本

工
業
博
覧
會

[illegible]

御婦人二代のお化粧……の内

代 の御婦人の お化粧には

（第一に）
 東京大阪の貴婦人令嬢間に流行式お化粧法として大流行の左の方法を勧め致します。
 脂を顔より牛乳よりも遙かに効な日本を物「クラシ」洗剤で能く顔を洗ふ。
 （第二に）
 一番よくきく「クレ」日焼止の薬用のお化粧「クラシ」を身クレンジングを顔から顔へかけて塗り、指先で能く擦込んでから、素手で軽く拭取る。

（第三に）
 一番高尚で美しい艶の出る

クラシ 白粉を

（第四に）
 一番に取、指先で能く擦つてつけ、（昔は顔よりも少し濃くする事）、
 牡丹毛で白粉を延ばし、水刷毛で白粉を均らし、素手で抑へて白粉を落付かせる。（前化粧には「クラシ」白粉を御使用の事）。
 お顔にホノリと様色の紅を添へる「クラシ」頬紅を、目の下から頬へかけて薄く刷きつけろ。
 （第五に）
 お化粧に一段の光彩を添へる「クラシ」白粉をセーム革につけて顔に薄く打ち、襟はボットに粉を塗らせて刷いた上をセーム革で軽く打ちよす。高尚で美しい淑式のお化粧が出来上るのでございます。